

救急外来で職員と職員家族に子宮頸がんワクチンのキャッチアップ接種をしています

静岡県立こども病院 小児感染症科 荘司貴代

2022年4月より子宮頸がんワクチン(以後 HPV ワクチン)の積極的勧奨再開とキャッチアップ接種が始まり、静岡県小児科医会の予防接種協議会の先生方と HPV ワクチンの推進と予防接種ストレス関連反応: Immunization Stress Related Response: ISRR の医療者の理解に力をいれてきました。産業医、子宮頸がんの患者会、助産師会、県内企業などで様々な情報提供の勉強会を開催し、各方面で推進していこうと前向きに取り組んでいただいています。

残念ながら我々小児科医は、キャッチアップ世代の学生や社会人との接点がほとんどありません。せめて周囲の対象者には、正しい情報提供と接種機会を提供したいと思い、救急外来:ER での接種を開始しました。皆様には、もう職員・職員家族への接種が終わっているかもしれません。まだこれからの方は是非お付き合いください。

キャッチアップ接種と静岡県内の接種状況

静岡県のキャッチアップ世代の女性は約 14 万人います。静岡県感染症対策課の調査によると、キャッチアップ接種が始まった 2022 年度に 1 回目を接種したのは 9625 人で約 7%でした。定期接種の 48.9%に比較してかなり低いです。接種率が低いのは当然で、対象者は大学生や社会人になったばかりです。接種するには、平日に休みを申請するか、混雑する土曜日にクリニックに予約を取るしかありません。住民票がある自治体で接種することとなっているので、帰省中に接種するとなると更に 3 往復分の交通費がかかります。かなり熱意をもってないと難しいです。しかも無料で接種できるのは 2025 年 3 月まで。あと 1 年半で 13 万人接種できる気がしません。

ER での HPV ワクチン接種の実際

荘司は ER を運営する総合診療科スタッフでもあり、平日 1 回/月の ER 当直と週末 2-3 回/月の ER 勤務をしています。本来の ER 業務が本業なので、対象は職員もしくは職員家族に限定しています。2023 年 3 月から開始して、半年で 20 人弱程度です。

毎月の当直表が確定しだい院内メールで職員に案内を出し、返信をくれた希望者にオーダーを立てます。小児医療者はワクチンが身近で不安は少なく、接種後の急性反応のリスクは低い集団です。心配なことは事前にメールで対応しているので、当日は接種するだけです。日勤終了後や夜勤明けの希望者が、帰宅時に ER に立ち寄り、問診票を書き、荘司が接種していきます。

週末は、学生や社会人の家族をつれた職員が接種にやってきます。HPV はコンドームで予防できないことや、すでに感染している可能性と婦人科検診の必要性についてリマインドし、友人たちに『HPV ワクチン接種したよ』と広めてもらうようお願いしています。父親が付きそいの時は、妻の罹患で介護が必要になる可能性や、上咽頭癌や肛門癌の原因であり、男性も無関係では無いことを説明します。接種したご本人は「平日休みの受診は無理で、土曜日は予約が一杯で打てなかった。打ててほっとした。婦人科検診もうけます。」と帰って行きます。薬剤師当直からも「荘司先生、週末 ER 勤務ですよ。HPV ワクチン在庫は 4 本でいいですか？」と協力してくれています。

副作用報道はなんだったのか？

予防の必要性はわかっているにもかかわらず、過去の副作用報道のインパクトはハードルとなります。事務職だけでなく医師からも相談があります。けいれんのような神経症状や、車椅子で裁判所に入って行く少女達の報道はどう考えたらいいのか？厚労省のパンフレットには具体的な説明がなく、納得できる方はわずかでしょう。名古屋スタディのような研究も、保護者にとっては知り合いの事例の説得力に負けてしまいます。

定期接種をする小学校高学年～高校 1 年生で、思春期まっただ中です。思春期は大人になる過程で身体的、精神的だけでなく社会的に急激な変化があります。学校や部活、受験、家庭内のストレスだけでなく、SNS 普及に伴う友人関係、経済的な貧困など、私たちの世代にはなかったストレスも増えています。ストレスに伴う身体症状は多彩で、慢性的な頭痛や腹痛、不眠で不登校となり、検査で説明できない痙攣や、機能的な嚥下障害、歩行困難など様々です。致命的な疾患が除外して不安を解消し、対症療法やリハビリで多くが回復していきます。発達素因や身体表現性障害を疑う場合や、強い不安で治療を要すると判断した場合は、こころの診療科に併診を依頼しています。

コロナ禍をきっかけに、不登校を主訴とした受診者は増加し、図らずも小児科医は思春期診療の経験を積みました。医療が関わることで「怠けている、気持ちの問題だ」と誤解されやすい思春期世代の困る症状に対して、積極的なケアの提供がしやすくなり、回復が早くなったと感じています。こうした思春期に頻度が高い病態は、副作用報道の車椅子の少女たちにとってもよく似ています。当時の小児科医たちが思春期診療の経験が浅く、彼女たちは診断がつかないという理由で病院を転々としたり、「気持ちの問題だ」と言われて傷ついたり、不安が募ったことでしょう。必要とするケアにつなげることができなかったことは、小児科医としても大きな反省点です。

副作用報道やコロナ禍の不登校増加を通じて、思春期世代のストレスと健康問題の理解について保護者とコミュニケーションし、不安解消もする、なんと高度なことをワクチン提供者は要求されているのでしょうか。